

Robert M. Zollinger, Jr./E. Christopher Ellison (著)
安達洋祐 (訳)

ゾリンジャー外科手術アトラス

森 正樹

大阪大学大学院教授・消化器外科学

またまた安達洋祐先生がやってきました。これまでに『消化器外科のエビデンス—気になる30誌から』(医学書院),『外科の「常識」—素朴な疑問50』(医学書院),『外科研修ハンドブック』(医学と看護社),『エビデンスで知るがんと死亡のリスク』(中外医学社)など、医師(特に外科医)や医療関係者の必読書となる本を出版してきた著者が、今回は外科手術書のバイブルである“Zollinger's Atlas of Surgical Operations, 9th ed”の日本語版を刊行しました。

本書を手にした最初の感想は、「これだけの量の本を、よくもたった1人で翻訳できたものだ」ということでした。今までに多くの医学翻訳書が出版されていますが、これだけの量をただ1人で翻訳したものを見た記憶はありません。多人数での翻訳は、翻訳の仕方、語彙の使い方など、細かなところで統一性に欠けており、読みづらくなることが少なくありませんでした。本書の場合、安達先生の翻訳にかかる迫力・執念を随所に感じながらも、楽しく読むことができます。それにしても1人での翻訳作業にはいかほどの時間を費やしたことか……、脱帽!

『ゾリンジャー外科手術アトラス』の特色は、「右ページの美しい線画と左ページの詳しい解説」です。絵を見ただけで『ゾリンジャー』とわかる独自の線画はファンが多く、豊

富なイラストと丁寧な解説を順に追っていくと、手術の場面に手取るように浮かび、手技や手順が頭に刻み込まれます。私の二番目の感想は、(当然ですが)その特徴が日本語版でもそのままに生かされていることです。すなわち、手術書の命である図が精緻で、線画はすべて色づけされて見やすくなっており、そこから躍動感あふれる美しさを感じることができます。日本語版では原著で不揃いだったイラストの大きさを調整することで、より素晴らしさが伝わるように工夫されています。ちなみにカラーになったのはこの第9版からのようで、この点、幸運と思います。

三番目の感想はオリジナルの改訂が的確に行われていることです。『ゾリンジャー外科手術アトラス』は1937年に初版が出され、その後70年以上にわたり刊行され続けています。まさに奇跡と言ってよいと思います。長く読み続けられているのは、改訂が的確に重ねられているからであり、1993年には第7版、2003年には第8版、そして2011年にはこの第9版が出されました。改訂を重ねる際は、時代の流れを的確に反映することが意図されているようで、今回の第9版ではヘルニア修復・結腸切除・脾切除・脾摘出・減量手術の腹腔鏡手術が収載されています。肛門手術などは大幅に改訂され、動静脈シャントなど、頻繁に行

われるいくつかの小手術は新たに掲載されています。

四番目の感想は、著者名が“Zollinger & Ellison”になっていて驚いたことです。「Zollinger-Elison症候群」(ガストリン産生腫瘍による難治性胃潰瘍)の息子同士なのです! まさに「父から子へ」伝えられた伝統ある本の記念すべき再出版が、今回の第9版です。そのような記念になる第9版が安達先生の手によって日本語に翻訳され、われわれの手元に届くのは、本当に嬉しく、ありがたいことです。

研修医や勉強中の若い外科医は手術に入る前の頭の整理、手順の整理に本書を用いてください。また、手術後に手術記録を書く際に参考にしてください。最近では手術動画での勉強の機会が多くなっていますが、手術動画では全体の流れや術者と助手の連携などを学び、本書のイラストでは手順や細部の解剖を学び、両方を上手に利用して欲しいと思います。中堅以上の外科医は若い外科医に指導する際に動画とともに本書を用いてください。本書を手にとった暁には、手術場に1冊、医局に1冊、自宅に1冊、それぞれ欲しいと思うことでしょう。

●A4/頁520/2013年/定価15,750円
(本体15,000円+税5%)

[ISBN978-4-260-01714-5]

医学書院 刊